

# ヒトから人間へ

村上陽一郎

人間の起源というとき、私たちは、無意識のうちに「人間」というものを定義している。生物学的な定義を与えるとすれば、生化学の発達のおかげで、かなり明確な定義が可能になっている。ヒト(念のために付言すれば、この「ヒト」という表現は、生物学上の種としての人間を表すものである)は、とりあえずは、体細胞核内の染色体の数(48)で区別され、かつ染色体の構成要素であるDNAの構造が、基本的には共通であることで、他の生物種と区別されることになる。生物学における種の定義も、色々な形で可能だが、巨視的かつ伝統的には、交配によって子孫を残せるか否かが、決め手になる。トラとライオンとは交配可能であり、第一代雑種(ライガー、タイゴン)は生存可能だが、ライガーもタイゴンも子孫を残す能力はない。このとき、ライオンとトラとは「異種」であることになる。そういう意味で、現生人類は、一つの独立した種であることは明らかである。いうまでも無いが、実際に生存している人間のなかには、染色体が48でない(特定の染色体に欠損があったり、あるいは過剰があることもあり、障害が生じながら生存が可能な場合がある)個体も存在するし、当然ながらDNAの構造(基本的には、DNAの連鎖を構成する四種類のヌクレオチドの並び方)では、個人差がある。しかし、そうした生物学上の特性が、種の定義を与えるのに十分であることは、現在では疑われていない。

本稿では、そうしたヒトが地球上に存在するようになる経過のなかで、それが、どのような意味で、「単なる生物学上の一種としてのヒト」から、「人間」という存在へと変質するのか、という点を考えてみようとするものである。

## 一. 地球と生命の生成

世界開闢に関して、現在科学者たちが共通の信頼できる仮説として採用しているのは、いわゆる「ビッグバン」である。これは、想像を絶する高密度に一点で集約されたエネルギーが、爆発的に解放されて宇宙が始まった、という考え方であり、そこから物質の生成や天体の形成に到る経過の大部分は、仮説的にはあれ、手に入る証拠によって確認されている。計算によれば、今から約140億年前に、その爆発が起こったと推定される。

私たちの太陽系における地球もまた、そうした推定のなかで、約45億年という歴史を与えられている。放射性の元素であるウラン、放射性カリウム、同ストロンチウムの三種類の元素は、崩壊して、それぞれ鉛、アルゴン、ルビジウムに変わるが、その半減期はかなり安定した値を示すので、地球上の岩石のなかのそれぞれの元素の組成分布を調べることで、45億年という数値が算出されている。

その最初の5億年ほどの間は、地球上に今日の生命体の痕跡は一切存在しない。しかし、それから1.5億年ほどの間に、どうやら地球は生命の最初の形を生み出したと推測されている。無論、どのような経過で、それが可能であったのか、仮説といえども、まだ信頼できる説明は無い、というのが正しいだろう。かつてミラーとユーリーは、放電という現象を利用して、炭素化合物からアミノ酸類似の物質の合成に成功した、と報告した。しかし、それが可能であったとしても、そこから複雑な情報を担ったDNAもしくはRNAに到る途は、ほとんど全くまだ暗黒である。隕石がその種子となるようなものを地球に運び込んだ、という外来説もまだ、有効であると考えられている。しかし、どのような経過を辿ったにせよ、地球上に生命の最も原始的な形態が出現したのは38億年ほど前であろうとされる。しかも、この原始的な形態に生命体は実に長い間留まっていたらしい。そして、よく知られる「カンブリア紀爆発」と呼ばれる時代がやってくる。

カンブリア紀は地球の歴史でいえば、5.5億年から5億年くらいの年代を指す。少なくとも化石が伝えるところによれば、この時期に突如として

「体制」を備えた無脊椎生物(最も著名なのは三葉虫である)が現れる。その理由も諸説定まらない。それから1億年ほどの間に、植物のなかには陸地に上がるものが出現し、動物もまた、陸棲のものが散見されるようになる。脊椎動物も、その近辺で現れたとされる。2.3億年ころから、いわゆる恐竜の全盛時代となり、その間に哺乳動物の原型も現れたと考えられるが、0.7億年ころに地球に落下した小惑星のため(と推測されるが)、恐竜時代は終焉を告げる。

## 二. 現生人類の祖先

現生人類の祖先についても、正確な同定は難しいが、化石として発掘されるもののなかで、最古のヒト科に属すると思われるものは、今のところアフリカのチャドから出土したサヘラントロプス・チャデンシスや、ケニア近辺で発見されたオロリン・ツゲネシスなどで、これらはパラントロプスと総称されることもあり、年代は700万年程度とされることが多い。このパラントロプス類は、脳容量は350ml、身長は1.5m程度、直立歩行、臼歯が優位にあるところから、現生人類の直接の祖先ではないか、という説さえあるが、化石に頼る限り、その後の歴史を直接辿ることが出来ない状態にある。

時代としては多少遅れて、アフリカではエチオピアを中心に、アウストラロピテクスと呼ばれる種類の種が多く発見されている。「ルーシー」という綽名で知られるA・アフレンシス、A・アナメンシス、そして南アで発見されたA・アフリカヌスなどがある。最後のアフリカヌスはほぼ300万年ほどの時代であったと推定されるが、脳容量は400ml程度であるが、様々な徴候から、アウストラロピテクスは、現生人類とは直接繋がってはいないと推測されている。

明確に現生人類に繋がると思われる化石人類は、タンザニアを中心に発見されるホモ・ハビリスと言われるもので、時代は200万年前後、脳容量は650～700ml、恐らく原始的な石器を使っていたと考えられている。こ

れに繋がるのが、かつて「ピテクアントロプス」という名で知られたホモ・エレクトスで、時代はH・ハピリスにほぼ繋がる150万年から10万年くらいまでの長い間棲息していた。脳容量は950～1,100ml、明らかに石器の使用が認められ、しかもアフリカから、アジアやヨーロッパなど他の大陸への移住も認められる。

こうして、ようやくヒトが登場することになるが、その一つはネアンデルタール人(ホモ・ネアンデルタレンシス)であり、もう一つが現生人類(ホモ・サピエンス)である。ネアンデルタール人とホモ・サピエンスとは、恐らく祖先を共通に持つ「亜種」どうしで、前者は20万年ほど前から2万年前まで棲息していたと思われる。ネアンデルタール人は、かつてはホモ・サピエンスの直接の祖先と考えられたが、分子統計学的な調査が進んで、祖先が共通であった、という結論が得られている。脳容量は現生人類の平均値よりも大きい1,600mlで、火の使用が跡付けられている。時期的にはほぼ重なって(しかし、恐らくは交雑はなかった)いるのがホモ・サピエンスで15万年前のアフリカ以降、東南アジアから中国大陸へは6万年前、3万年前にはヨーロッパ大陸へ、アメリカ大陸へは1.5万年前くらいに出現している。

### 三. 現生人類の特徴

ヒトに最も近い現生動物はチンパンジーだと言われている。それは分子系統学的な分析からも確認されている。お互いのゲノムのDNA構造は99パーセントは一致している。ヒトのDNA上のヌクレオチドの数はほぼ30億対である。したがって、異なるヌクレオチドの数は、ヒトの側から見れば約3000万ということになる。DNA分析では、しばしばSNP(読むときは「スニップ」と称する = single nucleotide polymorphism)が問題になる。これは、ある形質に関係するDNA上の部分で、ヌクレオチドが一つだけ違っているときに、大きな個人差が生じることがあることを表現している。つまり、一個のヌクレオチドが異なっていてさえ、フェノタイプが大きく異

なることを意味するから、3000万個の違いというのは、決して生易しいものではない。

ところでチンパンジーは道具を使うことがある。石を両手で保持して、岩の上に置いた木の実を、その石を叩きつけて割る、というようなことをするからである。かつて心理学者のケーラーは、部屋のなかに、机、棒、椅子などをばらばらに置き、高い天井にバナナを吊るして、その部屋の中のチンパンジーの行動を観察した。相応の時間かかっての試行錯誤の後、チンパンジーは、机の上に椅子を重ね、棒を掴んで椅子に乗り、バナナを叩き落すのに成功した。人間のみが、意志的、意図的な行動を構築できる、という前提に立ったとき、ケーラーは、そうした心理的な環境、もしくは「場」が誘導して、チンパンジーにそうした行動を取らせた、という解釈を与えた。今日、動物行動学者は、必ずしもそうした解釈を取らない。むしろ、チンパンジーにも、ある種の意志的行動を認めようとする。またチンパンジーの世界では、小規模ながら種間内殺戮を行うとされている。子殺しも行う。性比は2:1で雄が優位に立つ。雑食性であることも(肉食もする)人間に近い。行動学的な領域で、ヒトと異なる重要な点は、家族的な哺育が見られないことと、相互のティーチングが欠けていることだろう。

そこでヒトの生物学的な特徴を挙げてみよう。第一には早産気味の出生である。多くの哺乳動物が、出生後ただちに母親の乳房に自力で吸い付くことができるが、ヒトの新生児は、そういう点で全く無力である。この点は、ヒトにとって決定的な意味を持っていると考えられる。

例えば、原始歩行と呼ばれる現象が新生児に見られる。生れ落ちて数日の新生児の両脇を支えて、平板な板の上に降ろすと、両脚を交互に動かして、歩く仕草をすることがある。また、模倣現象もこの時期に現れる。しかも、そうした現象は、一、二週間のうちに完全に消滅する。つまり生まれ落ちた直後は、自力で歩行したり、模倣したりする能力の痕跡があって、それが表現されるが、あらゆる意志的動作や行動が、大脳を一旦通過した上で処理されるべきヒトの場合に、こうした生得的な能力は、むしろ抑制

されなければならないのではないか。したがって、ヒトの新生児は、生れ落ちた場面で形成されるコミュニティ (最小限でも母親に相当する存在との「二人一コミュニティ」=ウィニコットの表現) のなかで、当分の間哺育されなければならないことになる。筆者は、この状況における新生児を取り巻く物理的、人間的環境を「第二の子宮」と呼んでいる。この第二の子宮無しに、ヒトは生存し得ないのである。

#### 四. 第二の子宮と言語

第二の子宮の特徴は、小なりといえども一つの「社会」であり、そこに言語が介在するところにある。新生児は、言語を習得することによって、コミュニケーションの道具を獲得するが、しかし、言語の根本的な意義は、むしろそこにはない。言語は、世界の分節化の道具として先ずあるのである。世界をどのように見て取るか、それをヒトは言語によって習得する。言い換えれば、言語は、ヒトに「共通の世界」を見せてくれるのである。コミュニケーションが可能になるのは、まさに、相互にほぼ同じ世界を見ているからにはかならない。より簡潔に言えば、言語は何よりも先ず認識の道具として機能するのである。

それは、まだコミュニケーションの能力の発現していない新生児にも、母親をはじめ第二の子宮に属する人々が、常に繰り返し言葉をかけることから明らかだろう。その段階では少なくとも言葉によるコミュニケーションは期待されていないにもかかわらず、なお言語を使って話しかけるからである。

あるいはヘレン・ケラーがサリヴァン先生によって、見えない目を開かれるあの感動的な場面で、それまで彼女の感覚に混沌とした状態として与えられていた経験的世界が、<WATER>と掌に綴られた「言葉」を理解した瞬間に、明確な分節化によって秩序付けられることになったことにも、その点は象徴されている。

共通の言語を使うことによって、ヒトは、当該のコミュニティの一員に

なっていく。つまり「人間」になっていくのである。それは「人間」という日本語の単語の意味とも合致すると思われる。そこでは、人々は、ほぼ同じ世界を見、ほぼ同じ世界のなかで行動する。あらゆる共同体が、そのなかの個体が自分たちの成員の一人になったことを明確にするイニシエーションの儀礼を、何らかの形で用意しているのも、そのことを裏付ける。

したがって、コミュニティの成員としての人間は、生物学的なヒトのぎりぎりの限界に相当する。言い換えれば、ここから先の議論は、もはや科学の領域のなかに収まらない性格のものとなる。

言語は認識の道具である、と書いた。それは、新生児本人の外のコミュニティの資産である。つまり、それは個体の外から導入されるものと言える。先ほどの表現を繰り返せば、混沌たる状態に分節化と秩序を与え、一つの意味のある世界へと変化させるのが言語である。この外部社会に由来する認識の枠組みを、ここでは「ノモス」と呼びたい。それは、世界と、コミュニティ自体の双方に秩序を与えるものだからである。

## 五. ノモスとカオス

しかし、人間は、こうした外部社会由来のノモスのみによって成立しているわけではない。先に、同じコミュニティに属する人々は、ほぼ同じ世界を見、ほぼ同じ世界のなかで行動する、と述べたが、なぜ「ほぼ同じ」であって、「同じ」ではないのだろうか。そこに「個人」という概念が成立する根拠がある。人間は、それぞれ内発的なエネルギーの如きものを備えていて、外部社会由来のノモスに対抗する。そのエネルギーは、本来どの方向にも展開可能な、ブラインドなもので、「可能性」でもあるが、ここでは「カオス」と名付けよう。カオスは、ノモスによって特定の方向に徐々に誘導されていく、と考えればよい。しかし、カオスは常にノモスに対して受身で、その言いなりになるわけではない。むしろそれに反発し否定する働きをする。このようなカオスとノモスのせめぎあいは、個体によっても様々な形をとり、同一の個体においても、時期によって、様々な変化

する。この差こそ、同一共同体において、共通のノモスが支配しながら、個体の見る世界、行動する世界が、完全には同一にならない主たる理由である。

個体が第二の子宮のなかにある間は、そのカオスは「矯められる何ものか」という意味しか持たない。その意味では、その働きはヴァーチャルなものに過ぎない。しかし、個体差はあるが、通常は四・五歳になると、カオスの働きは、個体にとって意味を持ち始める。ノモスへの同調への、暗々裏の拒否が、色々な形をとって現れ始める。こうした傾向は、いわゆる思春期に至って最高潮に達する。場合によっては、葛藤が激しくなった結果、共同体を離れたり、新たなノモスの創出を目指して戦う、というような事例も生まれる。成人するにしたがって、この葛藤は緩やかになり、ノモスとカオスの均衡点は、比較的安定した状態で推移する。

この点は、個体差という場面でも顕著に見られる。上に触れたように、ある場合には、共同体のノモスそのものへの否定、拒否、そして場合によっては新たなノモスの創出を目指す個体もあり得る。多くの場合、彼らは、当該の共同体のなかでは異端者であるばかりでなく、革命家、あるいは犯罪者として遇される。社会学で言う、社会の「周縁」は、そうした個体たちによって造られることになる。

では、何故ヒトという生物種には、単なる生得的なエネルギーとしてのカオスだけでなく、ノモスが必要とされるのだろうか。それは、ヒトが、これまでには触れて来なかった、他の生物種とは異なった一つの生物学的特徴を備えていると考えることで説明ができる。それは、先に述べた、ヒトの行動が、大脳由来に集約される傾向があることからの、一つの帰結でもあるのだが、生得的な欲望抑制機構の欠如として表現できる。最も判り易い性的な欲望を例にとろう。他の哺乳動物では、雌に性的周期があって、交配はその時期に限られる。雄の欲望の充足も、それに順応している。無論、ヒトの女性にも性的周期はあるが、その時期も含めて、ヒトの場合、双方が望めば常に欲望の充足は可能である。言い換えれば、生得的な欲望



充足への抑制機構が、希薄化されている、と考えられる。食欲においても、獐猛と言われる猛獣でさえ、腹が満たされているときには、捕食活動は生得的に抑制されているが、人間は、古代ローマ人がしたと言われているように、ただ美食の欲望を満足させるためには、すでに食べたものを戻してまで、さらに食べようとする。そうした欲望は、大脳の意識的な働きで、言い換えれば想像力によって、どうにでも過大に膨らませられ、新たな欲望へとヒトを駆り立てる。その事実は、むしろある場合には、人間の「進歩」を生み出す創造的な力となることも否定できないが、そういう意味では、動物としてのヒトは、一種の欠陥動物でもあることを示唆している。それゆえ、人類は、動物としての欠陥を補うために、その発祥のころから、言語を発明し、それを使って、共同体の秩序を守るために、その内部で通用する欲望の抑制機構としても働くことのできるノモスを、生み出してきたのだと考えることができよう。自らの欲望の飽くなき充足を目指して行動する人間を、私たちはときに「動物的」とか、「動物のような」と表現するが、この表現は明らかに間違っている。それは極めて「ヒト的」なのである。逆に言えば、だからこそ、人間は「自律的」でなければならないことになる。その自律性をもたらすものが、ノモスとカオスの双方の働きから生み出される「個人」を成り立たせる。そこに「個体」から「個人」へ、もう一度言い換えれば、ヒトから人間への移行があると言えないだろうか。

本稿は、二〇〇八年六月一日に、本学キリスト教と文化研究所で開かれた講演会の講演内容を、忠実にではないが文章化したものである。機会を与えてくださった関係者に感謝の意を表する。

**Abstract****From homo sapiens to Human Being**

The most remarkable difference of a human being from other animals or particularly mammals is the deficiency of natural repressor of desire or lust.

Consequently it needs to accept nomos of its community as the repressor. The transference of nomos from community to its members is mainly realized through language both explicitly and implicitly. An individual of homo sapiens can only be a human being by sharing nomos of its community.

It, at the same time, is inherently invested chaos which is a blind energy to develop it to all the possible directions. In other words, nomos introduced in an individual plays the role of molding its chaos. It is the struggles between nomos and chaos within an individual that produce a genuine human being.